

朝来市

# 西林寺跡

急傾斜地崩壊対策事業【竹原野(3)】に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



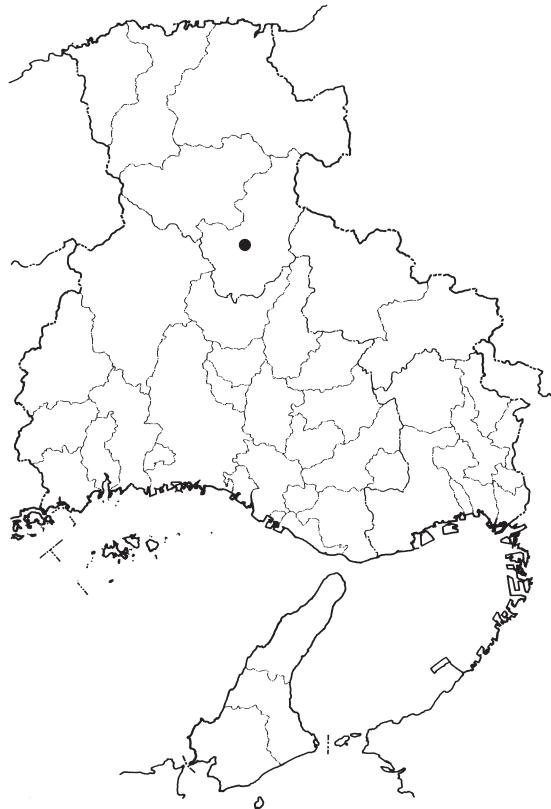
平成24（2012）年3月

兵庫県教育委員会

朝来市

# 西林寺跡

急傾斜地崩壊対策事業【竹原野(3)】に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



平成24（2012）年3月

兵庫県教育委員会



# 例　　言

1. 本書は、朝来市生野町に所在する、西林寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、兵庫県但馬県民局県土整備部養父土木事務所が進める急傾斜地崩壊対策事業（竹原野地区事業）に伴うものである。同事務所の委託を受け、兵庫県立考古博物館が平成22年度に本発掘調査を実施した。
3. 遺構実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館嘱託員が行った。
4. 写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については（株）地域文化財研究所に委託した。
5. 本書の図版1「周辺の遺跡」は兵庫県教育委員会発行の兵庫県遺跡地図1/35,000「但馬新井」・「生野」を使用し、一部に加筆した。また、同じく図版1「遺跡の位置」は、旧朝来郡生野町発行の1/2,500都市計画図を縮小して使用した。
6. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(TP)を基とし、方位は国土座標V系の座標北を指す。
7. 本書の編集・執筆は、西口が行った。
8. 調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に、作成した写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号）において保管している。
9. なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、朝来市教育委員会から御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。



## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに .....	( 1 )
第Ⅱ章 位置と環境 .....	( 3 )
第Ⅲ章 確認調査の概要 .....	( 5 )
第Ⅳ章 本発掘調査の概要 .....	( 6 )
第Ⅴ章 まとめ .....	( 8 )

## 図版目次

図版 1 遺跡（周辺の遺跡・調査区周辺の地形）
図版 2 遺跡（調査の範囲位置図）
図版 3 遺構（遺構配置図）
図版 4 遺物（出土遺物）

## 写真図版目次

写真図版 1 航空写真
写真図版 2 出土遺物 外面（上）・内面（下）
写真図版 3 調査前の状況
写真図版 4 確認調査の状況
写真図版 5 本発掘調査区全景
写真図版 6 上層の遺構 1
写真図版 7 上層の遺構 2
写真図版 8 上層の遺構 3
写真図版 9 下層の遺構
写真図版 10 土層断面・調査風景
写真図版 11 西林寺跡の現況



# 第Ⅰ章 はじめに

## (調査に至る経緯)

兵庫県但馬県民局県土整備部養父土木事務所が進める急傾斜地崩壊対策事業（竹原野地区事業）に伴い、平成21年度以降、兵庫県教育委員会は埋蔵文化財調査を隨時実施した。

## [分布調査の経過]

平成21年4月22日に当該地において施工対象範囲約1,600m<sup>2</sup>について分布調査を行い（遺跡調査番号2009009）、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高いと判断された。

調査に先立ち、朝来市教育委員会に照会したところ、対象地の東端部に、慶長11年（1606年）開基の記録を持ち江戸時代末期に衰退し、無住の期間を経て昭和25年に廃絶した西林寺跡が存在することが判明した。

現地踏査においても寺院に伴う基壇・礎石・石組み溝あるいは歴代住職の墓塔を含む墓地などが認められた。また、一部施工範囲に寺域が含まれ、範囲内に平坦面や石列などが存在することが判明した。

寺院に関係する範囲は施工範囲の内東半部である。急崖面の西半部については遺構・遺物は確認・採集されなかった。

## 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

館長	石野博信
企画調整班	調査専門員 種定淳介
総務課	課長 前川浩子
調査担当	主任調査専門員 吉田 昇
調査第1班	担当課長補佐 西口圭介

## [確認調査の経過]

分布調査（遺跡調査番号2009009）によって、事業地周辺に寺院に伴うと思われる基壇・礎石・石組み溝・墓地などが認められた。このため、平成22年10月18日付 但馬（養土）第1274号の依頼により、確認調査（遺跡調査番号2010228）を実施した。調査期間は、平成22年10月19日、調査面積は11.5m<sup>2</sup>であった。

調査は、工事範囲となる平坦面および緩斜面に南北4箇所に確認調査トレンチ（長さ約3m×幅1m）を設け、地下遺構の残存状況および土層堆積状態の確認を行った。機械及び人力による掘削を行い、寺院関連遺構の存否を視野に入れ、遺構検出及び断面観察を主眼に堆積状況の把握に努め、土層断面図作成・写真撮影などにより記録作業を行った。

## 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

館長	石野博信
----	------

企画調整課	主任調査専門員	吉田 昇
総務課	課長	前川浩子
調査担当	企画調整課	主任
		上田健太郎

### (本発掘調査)

確認調査の結果をもとに、平成22年11月11日付 但馬（養土）第1379号によって依頼を受け、施工範囲の一部について本発掘調査（遺跡調査番号2010267）を実施する運びとなった。

調査対象となる寺院関連遺構は、生野町史などの史料から、慶長11年（1606年）開基の浄土宗香炉山西林寺跡である。当寺は、18世紀末即ち寛政年間頃より衰微し、昭和25年（1950年）に到って東恩寺（現東西寺）と合併し廃寺となった。

本発掘調査対象範囲には、確認調査において報告されている石列（SF01）のほか、埋没した石垣や切り株が認められた。このため、一律に機械掘削は行えず、遺構が損壊する可能性のある部分については人力を主体に掘削作業を行った。

石列（SF01）周辺の掘削に際し、裏込めあるいは石列の下層に当たる層序から19世紀代の染付け磁器が出土した。この遺物の存在からSF01及び露出する石垣などの遺構についてはその殆どが19世紀以降即ち西林寺が廃寺に到る時期の遺構と考えられた。このため、石列などの現地表に近い遺構を面的に捉える作業は行わず、調査の力点を下層遺構の精査へと振り向かせた。

調査期間は、平成22年11月29日～22年12月1日（実働期間3日間）、調査面積は49m<sup>2</sup>であった。

### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

館長	石野博信
企画調整課	主任調査専門員 吉田 昇
総務課	課長 前川浩子
調査担当	調査第1課 担当課長補佐 西口圭介

### (本整理作業)

出土遺物の整理については、すべて平成23年度に実施した。

調査第2課	西口圭介
整理保存課	山本 誠・深江英憲
実測・製図・レイアウト	榎 真菜美

## 第Ⅱ章 位置と環境

### (地理的環境)

西林寺跡は兵庫県朝来市生野町竹原野に所在する。

朝来市（旧朝来郡）生野町は、神戸市より北北西へ64km、大阪より北西へ84kmで兵庫県朝来市（旧朝来郡）の最南端部に位置している。旧但馬・播磨の国境に位置し、北部は朝来町・山東町、西部から南部にかけては宍粟市一宮町、神崎郡神河町、東部は多可郡多可町加美区、丹波市青垣町に接している。

当町は平成17年4月、朝来郡全域の町合併により朝来市となった。平成17年10月当時の朝来市生野町の人口は4,716人、世帯数は1,705世帯、総面積は112.01km<sup>2</sup>である。

生野町は、四方を山に囲まれており、西部には段ヶ峰（1103.4m）・平石山（1061.2m）、南部に高畠山（983.8m）、東部に三国岳（855.2m）、北東部に釜床山（648.8m）、中央部西寄りには古城山（601m）といった標高600mから1000m級の高峰が巡る。

河川は、三国岳西麓の黒川に源を発する市川が町域を南西流し、古城山付近から南へと向きを変えて瀬戸内海へと向かう。また、丸山から発する円山川は北流して日本海へと向かう。生野町域では両河川が造り出す氾濫原と河岸段丘と、両河川にそれぞれ流れ込む中小河川が生み出す扇状地が狭隘な地形の中に居住域や生産域を確保しているのである。氾濫原と中小河川が造る扇状地のうち、比較的広い可耕地や市街地を確保できる地点は生野町域では市川が向きを変え南流する口銀谷地区に限られている。

以上のように狭隘な地形が目立つ生野町であるが、交通・流通の面からは、重要な位置を占めている。

和田山町加都遺跡では播磨国と但馬国を結ぶ古代官道跡「但馬道」が検出されており、京より播磨国府を通じて但馬国、更には古代山陰道へと合流し、日本海側へと至る重要な交通路が存在したことが判明している。このルートは生野以南では後世「生野街道」と呼ばれ、播磨・但馬の国境の生野峠（真弓峠）では中世には但馬の山名氏・播磨の赤松氏が争い、近世以降は鉱石輸送路として、更には現代の国道312号・播但連絡道路へと引き継がれ、更に国道9号と合流し、日本海側へと通じる交通・物流の動脈としてその価値は今も変わらないのである。

### (歴史的環境)

生野の名は古代よりあり、『播磨風土記』神前郡の条に「生野」の名が見える。鎌倉時代の古文書には生野の地名は見えないが、南北朝・室町時代には「生野の里」の呼称が見える。また、永禄12年（1569年）『山名祐豊感状』には生野の地名が見え、切れ切れではあるが中世を通じ生野の地名が用いられていたものと考えられる。

中世の生野町・朝来町域には荘園「広谷庄」が存在したことが、弘安八年（1285年）「但馬国大田文」の記載から判る。「但馬考」は生野・猪野々・奥野・小野・竹原野・上生野・簾野・丸山（円山）・菖蒲沢・岩屋谷・朝来町所在の津村子の11ヶ村を広谷庄に当てる。

近世に入り、生野は銀山開発によって重視され幕府直轄領となり、銀山廻として生野銀山町が形成され、生野代官所が置かれ発展してゆく。

生野銀山は、鉱区が猪野々・小野・白口・竹原野にわたり、近世初頭から創業し、銀、銅、更には鉛と主な産出品目の重点を変えながら存続し、昭和48年に閉山した。

今回、調査を実施した西林寺跡は、口銀谷から東へ分岐した谷中、市川上流の竹原野にある。

竹原野は小野の北側、金香瀬山の西麓に位置し、古くは高原と称したと言われる。正保年間（17世紀中頃）成立の国絵図には既に竹原野村と見える。

竹原野村の鎮守は小野の熊野神社である。村内の寺院は、市川右岸の内山地区にある真言宗 内山寺（遺跡番号 720012）と左岸側にある浄土宗 西林寺（遺跡番号 720017）である。何れも現在廃寺となっている。

竹原野は生野銀山の開発に伴い、寛永15年（1638年）には竹原野水抜き普請が行われ、元禄年間には既に銀山が開鉱され（竹原野筋）、あるいは口番屋が置かれるなど、銀山開発に伴って発達してきた。

現在は竹原野地区と緑ヶ丘地区に分かれ、それぞれ行政区になっている。西林寺のある緑ヶ丘区では、寺域の足元に、昭和31年（1956年）に一戸建ての鉱山社宅が建てられて街区が形成された。昭和53年（1978）に当時の生野町が三菱金属緑ヶ丘社宅を買収し、一般に分譲されて住宅地となり現在に至っている。

今回調査を実施した西林寺（720017）は、竹原野字万日谷4番地－金香瀬山の西麓標高40m前後に位置する浄土宗の寺院である。山号を香炉山、別名 万日寺と称される。寺の開基は旭誉上人、「寺院明細帳」では慶長11年（1606年）、「寺社縁起」では慶長6年と若干の違いがある。

周辺の遺跡は、先述した内山廃寺、口山神社跡（720016）・奥山神社跡（720015）以外には生野城跡（720002）・生野鉱山（古城山・大盛山地区 72006）や生野鉱山（金香瀬地区 72007）・生野鉱山（白口地区 72008）や、谷に沿って長く広がる生野代官所跡関連遺跡（72003）など近世以降を中心とした鉱山関連施設が占めている。

※遺跡番号は、兵庫県教育委員会2011『兵庫県遺跡地図』を使用

## 第Ⅲ章 確認調査の概要

### (調査の方法)

工事範囲となる平坦面および緩斜面に南北4箇所に確認調査トレンチ（長さ約3m×幅1m）を設け、地下遺構の残存状況および土層堆積状態の確認を行った。機械及び人力による掘削を行い、寺院関連遺構の存否を視野に入れ、遺構検出及び断面観察を主眼に堆積状況の把握に努め、土層断面図作成・写真撮影などにより記録作業を行った。

### (調査の結果)

平坦面に設定した1T～3Tでは、表土以下は主に礫混じりの細砂層で構成され、緩やかに傾斜する地山基盤層（ベース土）の上部に傾斜をさらに緩くしながら堆積している。また、平坦面の端部から石列が検出された。これらのことから、斜面の外方へ山土を盛り出して平坦面を設け、周縁に列石を巡らせた工程が復元される。一方、3Tの南東付近に存在する東西方向の石列は、3Tの南壁の土層断面では地山基盤層の上部に据えられていた。

なお、3Tの表土中から白釉の陶胎染付の椀1（18世紀後半以降）の破片が出土した。

斜面部分では比較的傾斜の緩い箇所に4Tを設定した。表土を除去したところ、地山基盤層と思われる礫混じりの細砂の堆積が認められるのみで、区画する列石などは確認されなかった。

4T付近の地表面においても白釉の陶胎染付の椀2（18世紀後半以降）の破片を採集したが、これは上方の平坦面から落ちてきたものと考えられる。

確認調査の結果、北東側の平坦部分では、本来の斜面（地山基盤層）の形状に、前面に山土を盛り出して平坦面を造成し、周縁に石列（本発掘調査のSF01）を設けている状況が確認された。事業範囲のすぐ東側に四隅に礎石を配した基壇が存在し、基壇前面のラインは平坦面周縁の石列主軸方向にはほぼ平行であることから、両者が関連する可能性が高い。ただし、基壇とその南側の高まり及び両者の間の東西方向の石列は、いずれも地山平坦面の上部に存在しており、盛り出しによる平坦面の造成が地山平坦面上の施設より後に追加して設けられた余地も考慮される。確認トレンチにおいて明確な掘り方は確認できなかったが、基壇上に存在したと見られる御堂の前に位置するこの平坦面上には、墓地など寺院関連遺構が存在した可能性も想定される。

平坦面を除く斜面部分では、4Tの結果から埋蔵文化財は存在しない可能性が高いと判断された。

## 第IV章 本発掘調査の概要

確認調査結果を受け、本発掘調査を平成22年度に実施した。

本発掘調査対象区は、確認調査トレンチ1（1T）からトレンチ3（3T）にかけての約49m<sup>2</sup>である。

### （層序と概要）（図版3 写真図版10）

調査区北壁の断面図を示した。調査区東端には平坦面が見られ、若干土壤化している（4層）。この土壤化は下層遺構に伴う旧地表と考えられ、平坦面は東側へと広がる。即ち、調査地点が西林寺境内の西端にあたると考えられる。

調査区の中程には南北方向に走るステップが削り出されており、一部に石材や石材の据付もしくは抜き取り坑があく。これらのステップ・石材が下層遺構である。

下層遺構は、その形状から上層に比べて小振りな石材を使用した石垣が亡失したものと考えられる。3層は拳大の石が入っている。石垣の裏込め土である。

2層は厚く下層遺構を覆っている。5層（地山）のブロック土に有機物が混交しており、土砂崩れに起因する堆積土の可能性が高い。

5層は調査区の西半では急傾斜面となって下降している。

本来ならば、上層の遺構を調査後、石材をすべて取り払い、2層を全掘し、下層遺構－ステップの状況を明らかにすべきであったが、本調査区の直下には民家があり、落石・土砂崩れなどに対する安全を考慮する必要があった。

このため、上層遺構の石列・石垣を残して2層を掘削し、更に下層遺構の底場（5層）の状況については、部分的な断ち割りによって確認するに止めた。

### （上層の遺構）（図版3 写真図版5～8）

上層遺構は2層の上面にある。下層遺構が土砂崩れによって亡失した後に構築された遺構である。

概ね現表土を除去した時点で検出している。確認調査時に認識した2本の石列（SF01・SF02）及びSF01の基底部にあたる石垣が上層遺構にあたる。

**塀の基礎（SF01）**：調査区の西端を南北に走る。幅約1.0m・高さ約0.5mを測る石積みである。両側（東西）に板石を積んだ面をもつが、中央には石積みは見受けられない。西面一斜面側については大半が崩落しており、東面即ち境内側の残りがよい。一辺約0.3m～0.5mの平石を繋げる。

また、石積みは、頂部の標高が約357.40mを測る。上部が平坦であることから、ほぼ本来の高さを保っていると考えられる。形状から土塀の基礎と考えられる。

**SF01基底部の石垣**：塀基礎の下層に存在する。その大半はSF01と同じく崖面の崩落によって無くなってしまっており、残存部の大半は調査区外にある。一辺30cm～70cmに及ぶ板石を並べており、整形した面を斜面側に向ける。この石組みは、SF01と軸を違えやや西側に振っている。SF01の一部ではなく、SF01が構築される際に土台とした石垣と考えられる。構築時期についても時期差が存在する可能性はある。

**SF02**：調査区南端において検出した。整形した面を南側に向け南北に石材が並ぶ。石列は平坦面上（地山面上）に構築された東端では2段となるが、下層遺構－ステップより西側にあたる部分ではやや大振りな石を使用し、1段で並ぶ。

また、SF01との取り付きは明確ではない。SF02の方位はSF01基底部の方位と直交する。

#### (下層の遺構) (図版3 写真図版5・9)

調査区中央を南北に走る段状遺構を検出した。旧地表を約0.4m掘り下げ、幅約0.5mのステップを造り、更に下層へと掘り下げている。

ステップ部分には径約0.7m前後の浅い土坑、径0.3m前後の石材が検出されている。土坑は石材の据付坑であった可能性がある。

検出状態から、下層の遺構はSF01・SF01基底部の石垣に先行する古い石垣であったと考えられる。

#### (出土遺物) (図版4 写真図版2)

5点の遺物を図示した。1・2は確認調査に伴い出土したものであるが、本節において述べる。

1は、確認調査1トレンチ(1T)より出土した復元口径約9.8cmの白釉の陶胎染付け片である。口縁端部は丸みを帯び、直口する。また、内面に呉須状の斑点があり、染付磁器の可能性もある。

時期は18世紀後半以降と考えられる。

2は、確認調査4トレンチ(4T)周辺より採集した。陶胎染付皿片である。小片のため、形状は詳らかではないが、扁平な器形と推定される。内面には絵付け及び露胎の部分が認められる。

時期は18世紀後半以降と考えられる。

3は、上層遺構(石列S F01)裏込めの濁茶灰色土より出土した。復元口径約9.0cmの施釉陶器皿である。立ち上がりは低く、端部付近で浅く内湾する。口縁端部は尖り、外側面に小さな面をもつ。内面には2本の刻線があり、その上から施釉している。内外面に施釉しているが、外面下半は露胎である。

時期は19世紀代と考えられる。

4は上層遺構(石列S F01)裏込めの濁茶灰色土より出土した。底径3.6cmを測る染付け碗片である。高台は高く、底部内面は丸く凹むいわゆる広東碗である。見込みには『寿』を描く。体部は細かく打ち欠き、面取りされ、面子に加工されている。

口縁端部は丸みを帯び、直口する。

5は上層遺構(石列S F02)南側より出土した復元口径約8.0cm・器高3.2cm前後の染付け小碗片である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸みを帯び、直口する。外面に絵付けが認められる。

時期は19世紀代と考えられる。

## 第V章　まとめ

今回の調査では、上層下層2時期の遺構を検出した。上層の遺構は19世紀以降に構築され、石垣上に幅1m前後の塀を造っていたと考えられる。その大半は崩落し失われたものと考えられる。

下層遺構は、時期は詳らかではない。堆積土の様相から土砂崩れによって亡失したものと考えられる。

今回調査地点となった西林寺は、竹原野字万日谷4番地－金香瀬山の西麓標高40m前後に存在した淨土宗の寺院である。

『生野史校補社寺編』（生野町 1974年）によると、山号を香炉山、別名 万日寺と称される。寺の開基は旭誉上人、『寺院明細帳』では開基は慶長11年（1606年）、『寺社縁起』では慶長6年と若干と違がある。

当寺は江戸時代初期には生野奉行の尊崇を受け、檀家数も宝暦年間（18世紀中頃）までは150軒を超える規模であったが、寛政年間には檀家数も減少し、本山への負担納銀に困り、本山 知恩院に次大寺格から小寺格への寺格の降下願いを出す事態にいたっている。

口銀谷の玉翁院の取り成しによって中寺格への降下は成了ったものの、明治初年頃には無住となり、荒廃し昭和25年に口銀谷の東恩寺と合併して東西寺となり、廃寺となっている。因みに寺格降下の取り成しをした玉翁院もまた、東西寺と合併、廃寺の道をたどっている。これら各寺院の廃絶は生野鉱山の衰退と密接に結びついていると考えられるが、今回は論考が及ばなかった。

西林寺は、史料上から江戸時代末期には衰微していたと考えられるが、調査結果からは、19世紀代以降に石垣・塀を新たに造るなど活動を行っていたことが判明した。

この上層遺構の石垣は 小葉田 淳『生野銀山史の研究』1954年所収の「大谷筋附近鍌筋並に古間歩絵図」に西林寺の3棟の寺舎とともに描かれており、少なくとも堂宇と共に存在したことは明らかである。

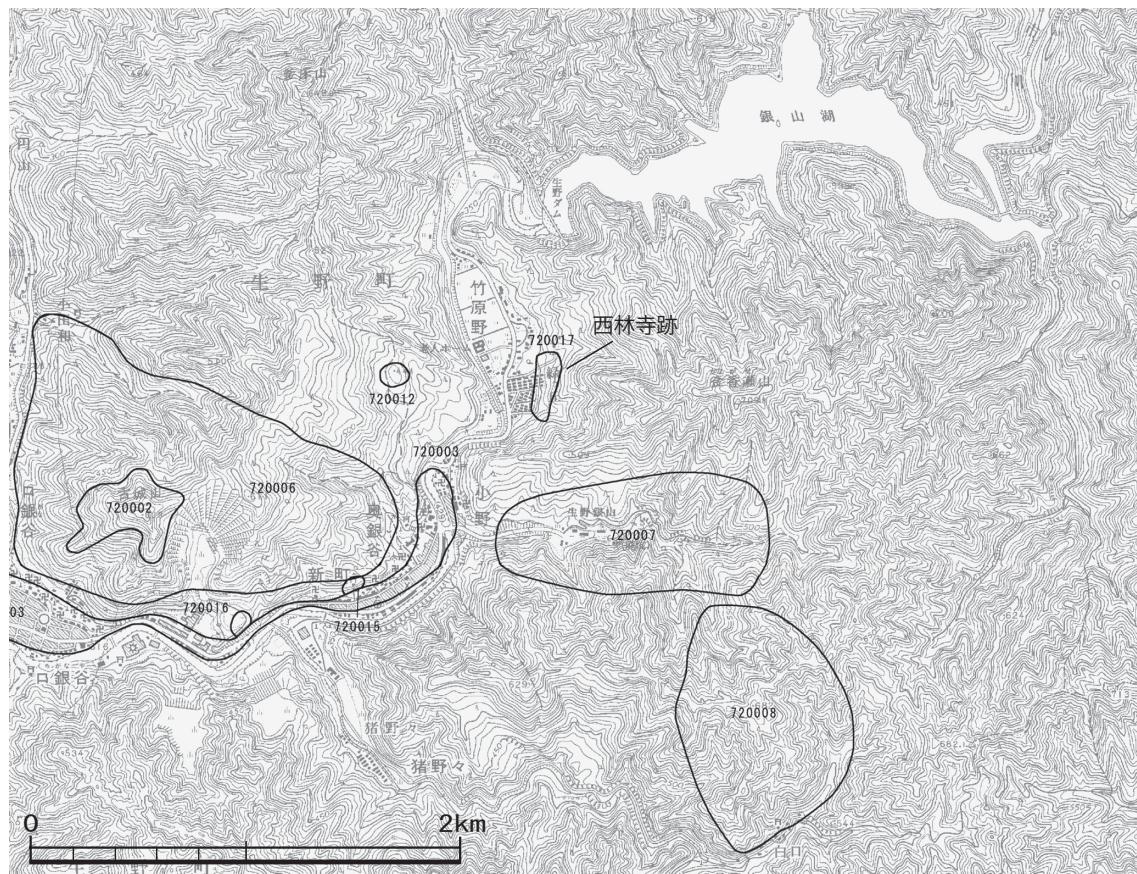
西林寺の変遷を知る一つの手がかりを今回の調査は提供できた。そのことを成果と捉えておきたい。

### 参考文献

- 柏村 儀作 1974 『生野史校補社寺編』 生野町  
小葉田 淳 1954 『生野銀山史の研究』 『京都大學研究紀要3』 京都大学

# 図版



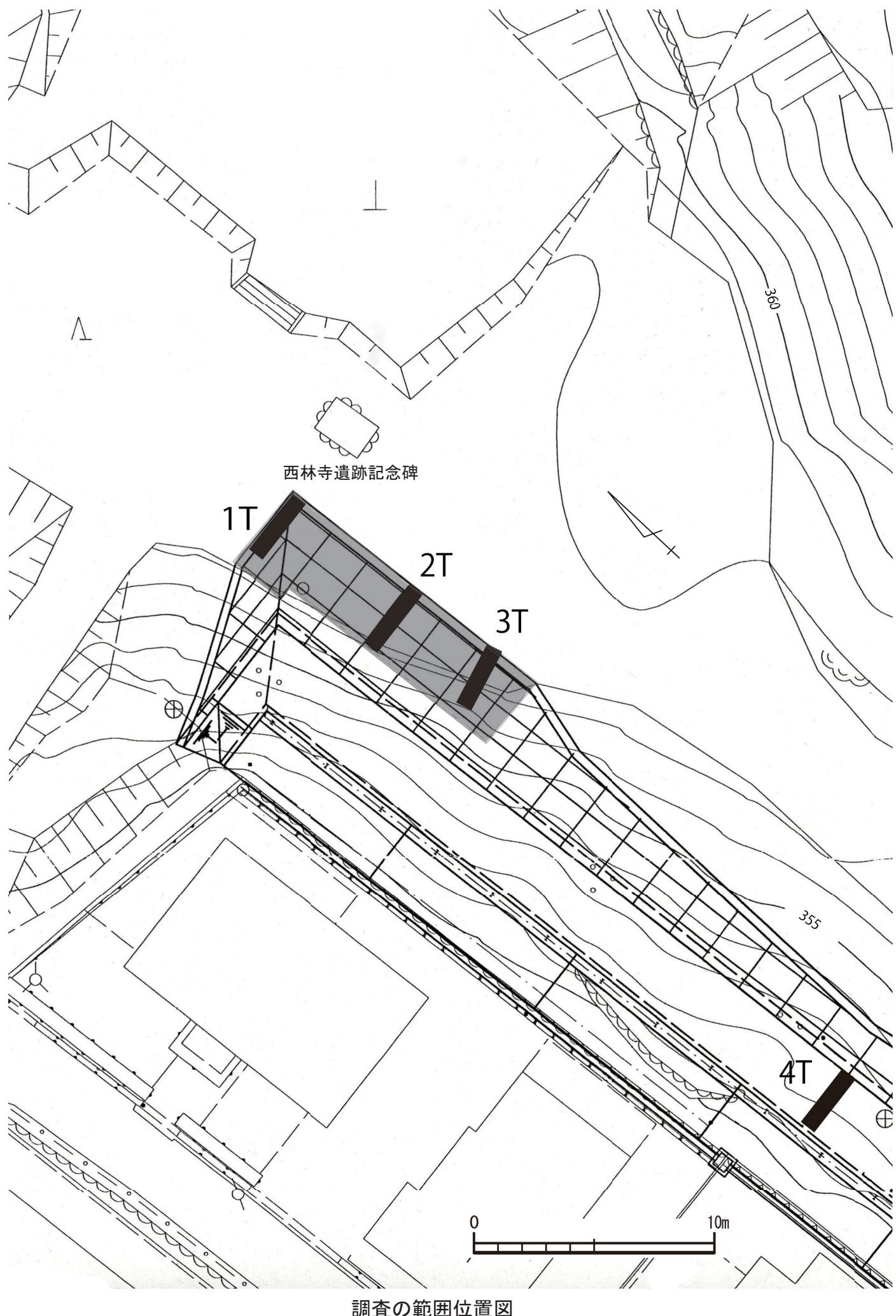


周辺の遺跡

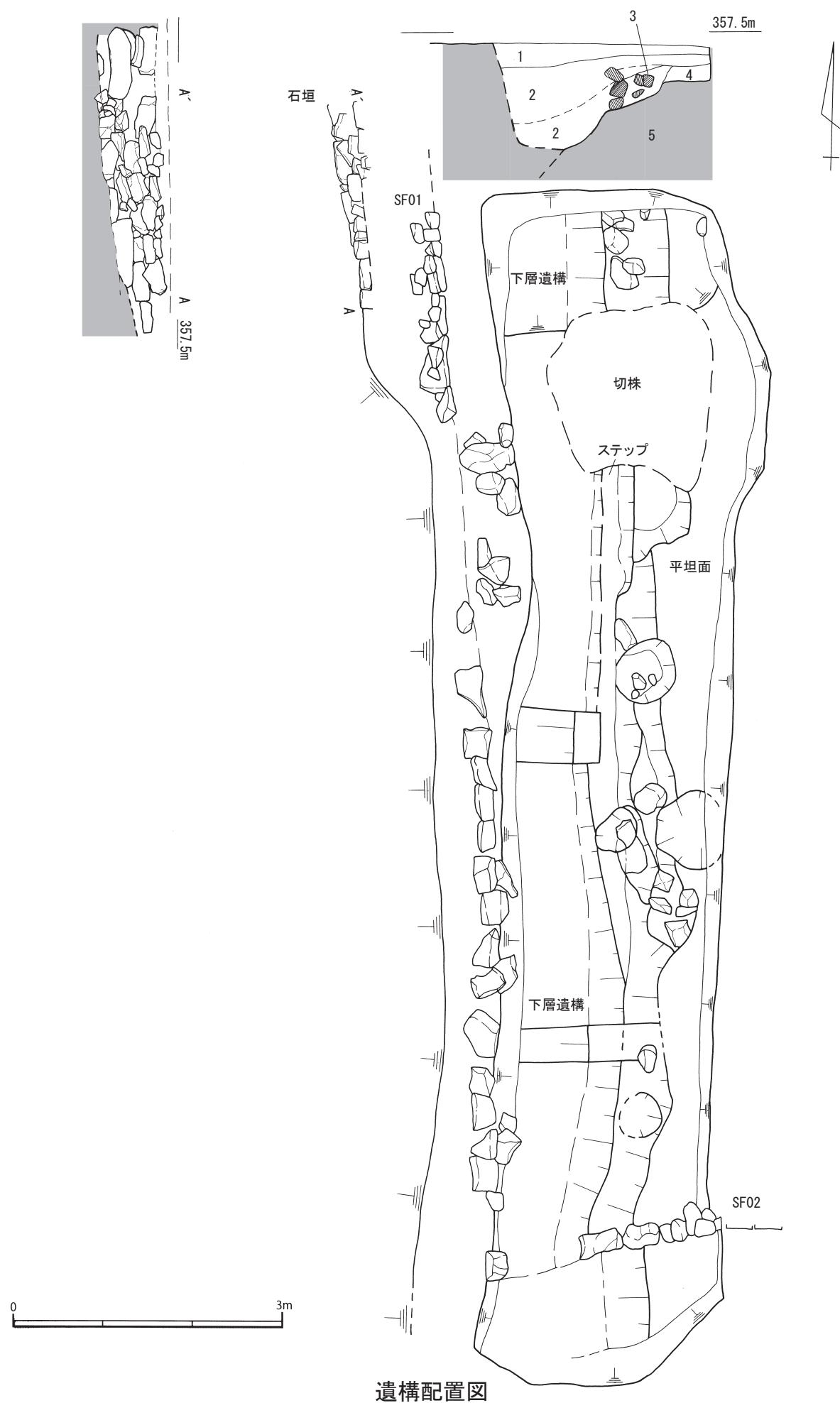


調査区周辺の地形

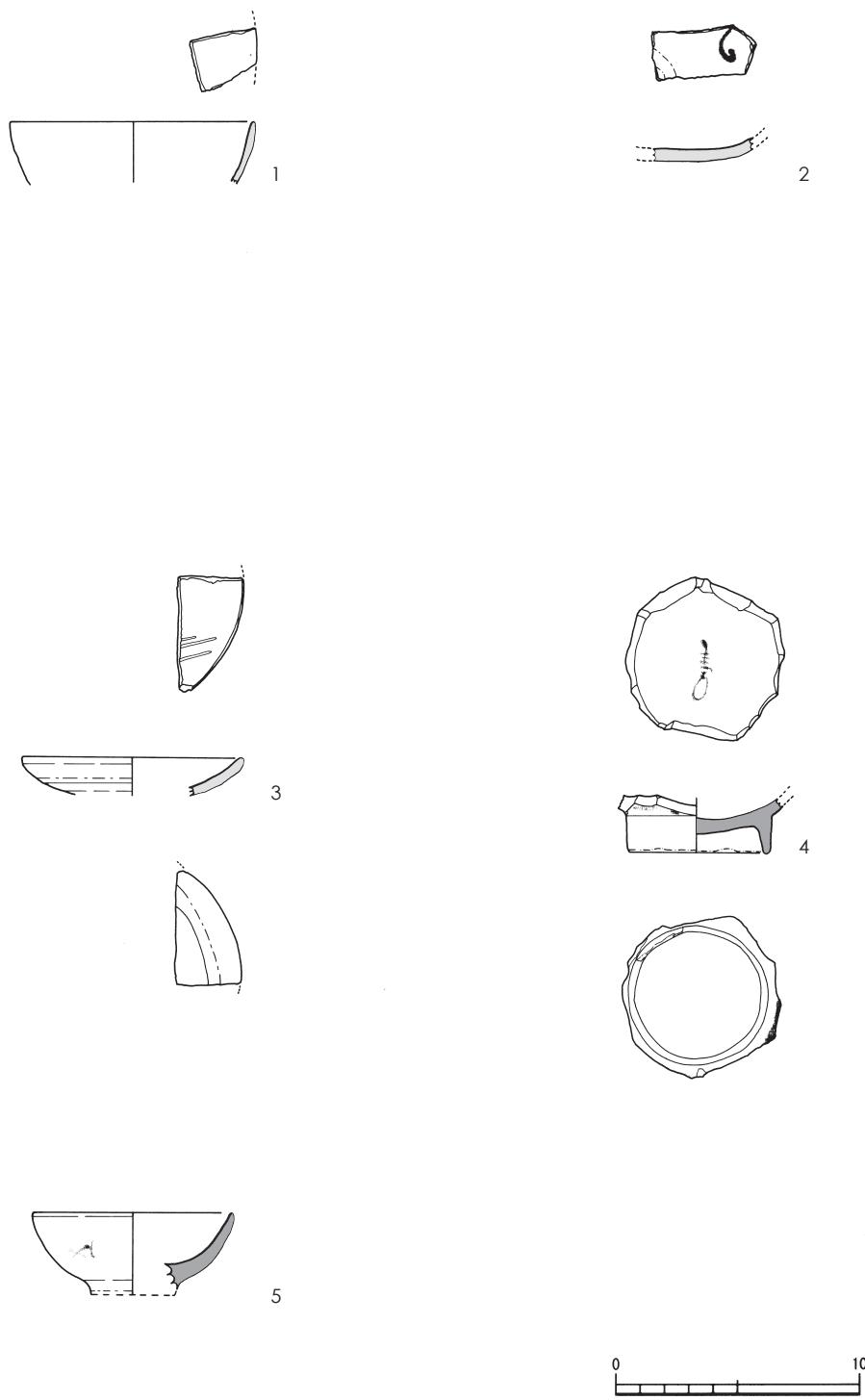
図版2 遺跡



図版3 遺構



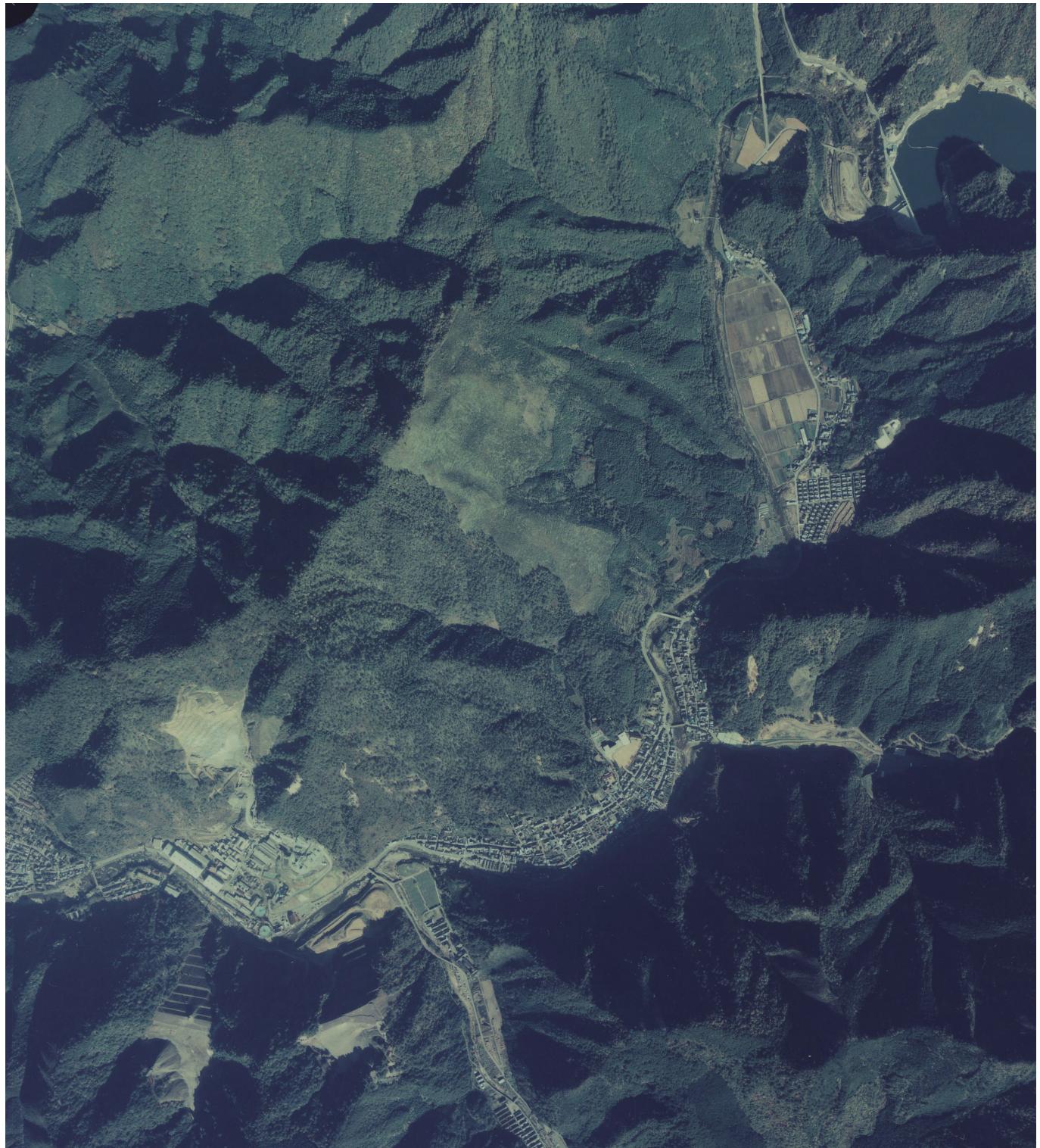
## 図版4 遺物



出土遺物

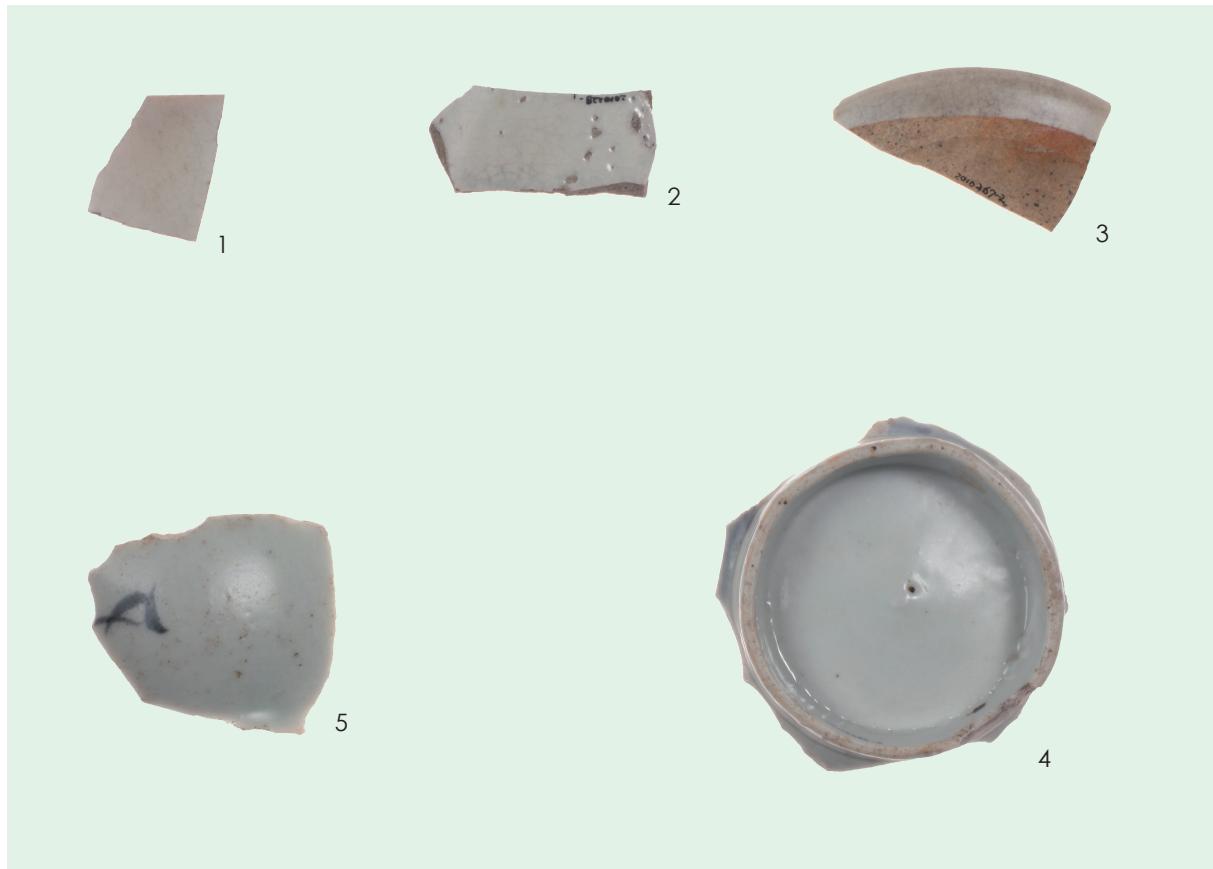
# 写真図版





航空写真（国土地理院1976年撮影）

## 写真図版 2



出土遺物 外面（上）・内面（下）



調査地点 遠景



調査地点 近景



調査前全景（北から）



調査範囲の北端



平坦面の状況（南から）

調査前の状況

## 写真図版4



1T北壁（南から）



2T（北東から）



3T（南東から）



4T（南から）

確認調査の状況



調査区全景（北から）



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

本発掘調査区全景

## 写真図版6



SF01 遠景



SF01 (外側北西から)



同 近接

上層の遺構 1



石積み細部



基礎石積み細部



SF01 上面の状況

上層の遺構 2

## 写真図版8



SF01 裏込め



SF02の状況



SF02

上層の遺構 3



下層石組みの状況



下層断ち割り



北壁部分の下層石組み

下層の遺構

# 写真図版 10



土層断面・調査風景



墓塔群



墓塔群近接



石塔

西林寺跡の現況

# 報 告 書 抄 錄

---

朝来市

兵庫県文化財調査報告 第413冊

# 西林寺跡

—急傾斜地崩壊対策事業【竹原野(3)】に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24（2012）年3月26日発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

Tel. 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 富士高速印刷株式会社

---

